

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

<北海道熊研究会 会報> 第 103 号 2021 年 7 月 18 日

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

ご意見ご連絡は本紙送信 email ではなく、下記の email へお願い致します

e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

既報会報の 1~102 号は Website に「北海道野生動物研究所」と入力しご覧下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

寄稿者 一般財団法人 日本熊森協会

名誉会長 森山 まり子 氏

題名 本州での熊(月輪熊)問題として、協会本部所在地である「兵庫県で、人里に熊(月輪熊)が出て来るようになった理由」

(1) 私は以前、森に関心がなかったので、山を注意して見ることはありませんでした。しかし、1992年(平成4年)にツキノワグマの保護活動に立ち上がってからは、九州、四国、西日本、中部、北陸、関東、東北と全国各地の森に入り、顧問の研究者と中を注意深く見て歩くようになりました。

(2) 初めて北海道に行ったときには、まとまった自然が残されているのにびっくりしました。外国に来たのかと錯覚しました。こんなに自然が残されているところは、日本では北海道だけだと思います。北海道がなければ私たちは外国にでも行かない限り、こんな豊かな自然を見ることができなかつたらと思うと、本当に、北海道は貴重です。平地にも森が残されている風景に感激しました。今後、北海道を一切開発しないでほしいと強く願います。自然保護にかかわる者にとって北海道の自然は日本の宝です。

(3) 本州では、人間が長い間自然を破壊し続けてきました。特に西日本はまとまった自然がもうほとんど残されていません。もちろん、地域によってかなりの差異があります。私の住んでいる近畿地方は、昔から都があったところで、人口も多く、工業も盛んで人間が自然を破壊し尽くしてしまったところです。平地は田畑か人間の建造物で埋まっています。私は子供のころ、森は山にあるものと思い込んでいました。後に、8000年前の日本列島想像図を見た時、全島が平地まで森に覆われていたのでびっくりした次第です。

(4) こんな近畿地方にもツキノワグマが生存しています。なぜ生き残ってこれたのかというと、**神様が棲んでおられるからと祖先が奥山を聖域化し、「入らずの森」「開かずの森」として、手つかずで保全してきたからです。**私の住む兵庫県では標高 800 メートル以上にブナやミズナラが繁る冷温帯の森が残されていました。ツキノワグマたちはその冷温帯の森の中で生息地を保証され、ひっそりと暮らし続けて来れたのです。(棲み分け共存)

(5) **1992年にツキノワグマの保護活動を始めてからは、私は奥地に出かけて行っては、当時のお年寄りたち(大正生まれや昭和初期生まれの方たちです)に、ツキノワグマの話を聞いてまわりました。**

(6) 地元のみなさんが言われるには、クマは昔は見たくても見れない動物だったということです。山に入るとツキノワグマは臆病なので、人が入ってきたことを察知してさっと逃げってしまうため、奥山にはクマという動物がいると猟師に聞いたことがあるが、実際に見た人はまずいないということでした。奥地の方で、昔はクマに毎日会っていたという人もいましたが、会ったら「おはよう」と挨拶する間柄で、別に山にクマがいても何の問題もなかったと言われていました。

(7) 兵庫県には東北地方と違ってマタギ文化がありません。1953年(昭和28年)からのツキノワグマ捕獲数グラフを見ても、クマは狩猟でわずかに例外的に獲られているだけです。近畿地方では、明治になるまで1200年間出続けていた殺生禁止令の影響が近年まで残っていました。多くの人々は仏教の影響もあり、殺生を嫌います。大正生まれの私の父は農家

の生まれで、田舎にいたころは何度もイノシシに田畑を荒らされて頭に来ていたようですが、子供のころから殺生はいけないと教えられていたので、殺すなど考えたこともなく、ひたすらシシ垣の補修に汗を流していたと言っていました。兵庫県でクマを有害として殺すようになったのは平成になってからです。平成になるまで、クマが人里に出て来ることはまずなかったということでしょう。(平成1年1989年)

(8) では、なぜ平成になるとあの怖がりのクマが山から出て来始めたのかということですが。最初のころは、農家の庭の柿の実を狙って秋に出て来ていました。なぜ柿の実を狙わなければならないようになったのかというと、冬ごもり前の食い込み用食料が山で不足するようになり、冬眠できなくなったからだだと私たちは考えています。(現在は、状況が変わり、1年中山に餌がない状態になったので、クマは里に住み付き、1年中人に目撃されるようになっていきます)

(9) なぜ秋に山の餌が足りなくなったのか、**第一原因は戦後の林野庁の拡大造林政策です。**奥山に林道がどんどん敷設され、クマたちが棲んでいた兵庫県北部豪雪地帯の冷温帯の自然林の多くが皆伐され、跡地は植えられるだけ植えたというスギとヒノキの人工林で埋まりました。スギとヒノキの葉は苦くて動物たちは食べられません。秋になっても動物の餌となるような実がなりません。苗木が大きく育った平成になると、スギやヒノキの葉は日光を通さない上に1年中葉がついているので、林床の下層植生が育たず、山は林業不振で放置され、人工林内は草1本生えない茶色一色の死の世界になってしまいました。(放置人工林)

(10) 大量に食べなければ生き残れない冬ごもり前の食い込み期に、エサ不足に耐えかねて、背に腹は代えられず、ついにこわい人間がいる里に出て来るようになったのではないかと私たちは思っています。1992年当時は、山から出てきたクマをみんなで追いかけてまわして撃ち殺していましたから、北海道のヒグマのように、人が銃でクマを追いかけてなくなり、罠を多用し始めたから、人を恐れなくなって出てきたのとは違うように思います。(北海道の森には、今もクマたちの食料がある)

クマは本来昼行性ですが、里に出て来るクマは人に見つかることを恐れて夜行性です。時々山への朝帰りが遅れて、人間に見つかり、恐怖心からパニックになって人から逃げたい一心で人身事故を起こします。長野県在住の宮澤正義先生の研究では、クマと人との臨界距離は12メートルで、それ以上の距離があると必ずクマの方が逃げるそうです。(子連れのクマの場合は20メートル、巣穴の場合は5メートル) 臨界距離内に人が入ると、もう逃げられないと判断したクマは、逃げる時間を稼ぐために人に走り寄り、前足で人をはたくなどして人がひるんだすきに逃げようとします。よって、多くの場合、傷はひっかき傷です。ツキノワグマの人身事故がヒグマと違って格段に多いのは、ツキノワグマが人間を恐

れるあまりであると考えられます。

(11) **クマが山から出て来る理由は山の餌不足であると思うことを裏付ける資料がありません。**兵庫県のクマの目撃数・捕殺数・ブナ科の豊凶グラフを見てください。2004年にありえない山の実り大凶作年が出現しました。多くのクマが里に出て来て目撃されましたが、当時兵庫県はクマ保護体制をとっていたので、目撃は多かったものの捕殺しませんでした。翌年の2005年は一転して、ありえないような山の実り大豊作年になりました。すると、里に出て来るクマはほとんどいなくなっていました。

(12) **ところが2006年再び大凶作年で、またまたクマの目撃数が跳ね上がりました。**20010年は山の実りが再び大凶作となった上、北部のクマの生息地でナラ枯れが広がり、一気に冬眠前の重要なドングリであったミズナラが枯れました。これまでにない目撃数となったのは、そのためだと思います。この年から、兵庫県はクマを駆除する方針に切り替え、クマは大量捕殺されるようになっていきます。

このころになると、兵庫県の地元はシカやイノシシを獲るための箱罠でいっぱいになってきましたから、錯誤捕獲されたクマが108頭という、これまた驚くべき数になりました。兵庫県は、錯誤捕獲されたクマは鳥獣保護法に従い放獣しましたが、クマの目撃数が増えてきたのはクマの生息数が2字曲線で増加してきたからだとして、クマをどんどん有害捕殺し始めました。

(13) **北海道ではナラ枯れがまだ起きていないので、北海道の方には、ひと夏で一気にミズナラの9割が枯れるナラ枯れの恐ろしさは想像できないのではないかと思います。**また、ブナの木が地球温暖化で弱ってきたのでしょうか、実がシイナ化し、中身のない殻だけの実になってきました。もちろんシイナは食料になりません。

(14) **また、これも、地球温暖化が原因と思われるのですが、積雪の減少やそれに伴うシカの増加でササなど奥山の下層植生が完全に消え、昆虫の大量絶滅が始まり、送粉者を失ったことにより虫媒花も実らなくなっていました。**かつてのクマの生息地であった奥山は、巨木だけが立つまるで公園のような場所に一気に様変わりしてしまいました。怖がりのクマたちが身を隠す場所さえありません。自動撮影カメラをかけても、クマが写ることはほとんどなくなりました。

(15) **兵庫県のクマは、春の山菜、夏の昆虫や液果、秋の堅果、ことごとく食料を失ってしまい、やむおえず生き残るために里に移動してきました。**里は今や過疎化高齢化で、人も少なく、放置された木々が生い茂っており、クマが身を隠しやすくなっています。最近、里山にクマが住み着いていると思われます。集落の裏山で自動撮影カメラをかけると多く

のクマが写ります。

(16)山の実りが悪かったこともありますが、2019年2020年と、ツキノワグマの殺処分数は2年間で全国合計1万1千頭という前代未聞の驚くべき数に上りました。今、里には、イノシシやシカ用の箱罠、くくり罠が無数にかけられており、これらの罠にクマが錯誤捕獲されてそのまま多くが殺処分されています。私たちは、早晚クマが各地で地域絶滅し始めるだろうと思っています。北海道とは全く事情が違うクマの受難だと見ていますが、自然界は人間の頭では計り知れない超複雑系で、真相は、神のみぞ知るです。

(17) もちろん、昔、マタギ文化が根付いていた東北地方、拡大造林でスギやヒノキではなくカラマツを植えた長野県、北陸地方のようにスギを奥山ではなく里山に植えた地方など、地方地方によってさまざまな違いもあります。最近では、自然再生エネルギーとしてのメガソーラーや尾根筋への風力発電が、クマたちの最後の奥山生息地を一気に大破壊し続けています。

(18) どちらにしても、今の日本の野生動物対応は、山から出てきたら殺す、生息数を推定して人間が考えた適正生息数に低減させるために殺す (ワイルドライフマネジメント)、殺すばかりです。共存のために一番必要な生息地の保証やその次に必要な被害対策がほとんどなされていません。人間の事しか考えず、他生物への思いやりを失った今の日本人は、かつての西洋文明がしたように、種の大量絶滅という取り返しのつかない失敗をやらかし、多くの生き物たちの働きによって成り立っていた水源の森を失って自らも滅びに向かうことでしょう。 (了)